

西田幾多郎「私と汝」論の生成と発展

—汝との応答を通じた〈自覚の始まり〉—

2021（令和3）年度提出

たかやしょうこ
高谷 掌子

論文要旨

本稿は、哲学者・西田幾多郎（1870-1945）の「私と汝」論における「自覚」概念を検討することにより、教育学者・森昭（1916-1976）の「人間生成」論における「自覚主義」批判に応答することを目的とする。

近年、日本の教育哲学・教育思想史研究においては、戦後教育学の批判的捉え直しの一環として、哲学の京都学派が日本の教育学に与えてきた影響の再評価が進んでいる。その中で、京都学派の筆頭となる西田の哲学もまた、参照される機会が増えている。そうした研究では、これまで閑却されていた戦前・戦後の教育学の連続性および教育思想間の連関を照らし出す光源として、あるいは、西田の弟子世代における教育思想の独自性を析出するための比較対象として、西田哲学が参照される。つまり、そこでは、西田哲学は学説史研究の一環として断片的に参照されるにとどまっており、西田哲学それ自身もつ教育学的思考の可能性は、十分に追究されてこなかった。

これに対し、本稿は、こうした学説史研究の成果を、西田哲学へと折り返す可能性を提起する。すなわち、戦後の教育学が西田哲学から引き継ぐことをこぼんだものを、西田哲学へと問い返し、それに対する西田哲学からの応答を聞き取ることを試みる。それによって、戦後の教育学が実現してきたものとは異なる仕方で、西田哲学から始まる教育学的思考の可能性を探求する。

この探求を始めるに当たって、本稿が手がかりとするのは、森の「人間生成」論における「自覚主義」批判である。森は、戦前の京都帝国大学で、哲学者・田邊元（1885-1962）および教育学者・木村素衛（1895-1946）に学んだことから、京都学派の系譜上にある人物である。しかしながら、戦後の森は、京都学派の哲学からの影響を自ら否定したとみなされてきた。大著『教育人間学』（1961年）をはじめとする戦後の著作において、森は「人間生成」論の立場から独自の教育人間学を構築した。それは、「人間は自覚する存在である」という定義から出発する「自覚主義」の哲学的人間学に対して、「人間は自覚するようになる存在である」という定義を作業仮説として掲げることにより、経験科学的に「人間生成」を研究しようとする。哲学に対して経験科学、京都学派のキ

ワードである「自覚」に対して「生成」の意義を強調する点で、森は京都学派の哲学に対して教育人間学の独自性を主張したと解することができる。

近年の学説史研究においては、『教育人間学』執筆時に、森と田邊の間でその内容をめぐってやりとりが交わされたことと、そのやりとりが最晩年に至るまでの森にとって重要な課題を与えたことが明らかになってきている。しかしながら、森が「人間生成」論によって哲学に対する教育人間学の独自性を主張したという点については、田邊によって論点としては十分に受け止められなかったと指摘されている。

これに対し、本稿は、森の「人間生成」論における「自覚主義」批判を、田邊ではなく西田に問い直す可能性を提起する。その根拠は、森の「自覚主義」批判が、田邊による西田哲学批判と共通性を有することにある。田邊は、西田の後継者としてのポストにありながら、「西田先生の教を仰ぐ」(1930年)以降、鋭い西田批判を展開したことで知られている。その批判は、西田哲学においては自覚の事実が「与えられたもの」とみなされており、これを「求める」という哲学の営みが棄却されてしまうという点に向けられた。このことは、森が哲学的人間学の「自覚主義」における自覚の所与性を批判し、自覚の「生成」の意義を強調したことと共通する。したがって、森の「自覚主義」批判は、田邊に向けられたものというよりも、むしろ田邊の西田批判を継承したものと考えることができる。

この考察を受けて、本稿は、森の「自覚主義」批判を〈森教育人間学から西田哲学への問い〉として再定式化する。すなわち、森教育人間学の立場から、西田哲学は「自覚の事実」(「人間は自覚する存在である」)を前提とすることによって、自覚の「生成の事実」(「人間は自覚するようになる存在である」)を看過してはいないかと問う。それは、戦後の森が西田哲学から引き継がなかった「自覚の事実」の意味を、改めて西田哲学へと問い返すことを意味する。そのうえで、本稿は、〈西田哲学から森教育人間学への応答〉を聞き取ることを試みる。

そのために注目するのが、西田哲学の中でも「私と汝」論における「自覚」

論である。「私と汝」論は、西田が田邊からの批判を「考慮」して執筆した論文を含む論集『無の自覚的限定』（1932年）の終盤に登場する。同書の序盤から中盤にかけて、西田は田邊からの批判に応答して、「永遠の今の自己限定」という時間論を展開する。「今」に重心を置くこの時間論を通して、自覚はすでに「与えられたもの」ではなく、これから「求める」ものでもなく、まさに今〈始まる〉ものであることが明らかになる。このような時において〈始まる〉自覚は、「人と人との空間的關係」に基礎づけられていると論じるのが「私と汝」論である。それによれば、自覚は汝との応答を通して、一瞬一瞬に新たに〈始まる〉ものである。

このように、「私と汝」論における「自覚」概念が〈自覚の始まり〉に焦点化するものであったということは、西田哲学において自覚が単に「与えられたもの」ではなかったことを示す点で、田邊と森からの批判に対する応答となる。しかし、それでもなお、西田哲学は自覚が〈始まる〉ということを所与の事実として前提しているのではないかと再批判することが可能である。そこで問題となるのは、自覚が〈始まらない〉と訴える「汝」が現われたときに、「私」は何をなしうるかである。本稿は、この問いを、「私と汝」論以降の西田哲学に問いかける。とりわけ、論文「私と汝」の翌年に執筆された西田の教育学論文と、その宛先とも考えられている弟子の木村素衛との師弟関係に着目する。それによって、再批判を踏まえたうえでのさらなる〈西田哲学から森教育人間学への応答〉を聞き取ることが試みる。

以上から、本稿の探究は、次の二つの焦点をもつ。第一に、西田の「私と汝」論における「自覚」概念が〈自覚の始まり〉に注目するものであったことを明らかにすること。第二に、西田の教育学論文およびその執筆前後における木村との応答を通して、西田が〈自覚の始まり〉をいかにして伝えようとしたかを明らかにすること。これらの二つの課題を受けて、本稿は次のような2部構成をとる。

第1部 「私と汝」論の生成—汝との応答を通じた〈自覚の始まり〉

第2部 「私と汝」論の発展—「自覚」を伝えるとはどういうことか

第1部は、第1章から第5章までの5つの章から構成される。

第1章では、西田哲学における「私と汝」論の位置づけを、先行研究に拠って明らかにする。本稿は、西田哲学の時期区分として、初期・前期・中期・後期の四期区分を採用する。まず、初期から中期にかけての「自覚」は、「純粹経験」・「自覚」・「場所」の動的転回の中項であると同時に、新カント学派やフイヒテの哲学における Selbstbewusstsein の翻訳語としての意味を担っている。次に、「絶対無の場所」へと深まる中期西田哲学においては、「自覚」もまた「絶対無の場所」として、形而上学的・宗教的色合いを帯びる。最後に、「歴史的世界」へと開かれる後期西田哲学においては、「自覚」もまた「世界」の自覚として、世界の側からの視点を獲得する。このように整理するとき、「私と汝」論における〈自覚の始まり〉は、西田哲学が中期から後期へと移行する時期に当たる。それゆえ、それは、西田哲学が独自性を認められるようになった中期の「場所」論の深みを保ちつつ、次第に後期の「歴史的世界」へと開かれていく途上にあるといえる。

第2章では、「私と汝」論における「自覚」が、特に「情意的自覚」として性格づけられることを明らかにする。「私と汝」論を含む論集『無の自覚的限定』には、哲学の動機は「深い人生の悲哀」であるという有名な一節があるが、詳しい説明は見られない。本稿では、西田哲学において「悲哀」と同じく「情意的なるもの」である「愛」の概念を考察することにより、とりわけ中期の西田哲学体系において「情意的自覚」が中心的な位置を占めるに至った経緯を明らかにする。加えて、その過程において、アウグスティヌスの愛の概念からの影響が重要であったことを指摘する。

第3章では、「私と汝」論に至る直前の西田哲学が展開した「永遠の今の自己限定」という時間論を、『無の自覚的限定』の前半の諸論文を検討することによって明らかにする。まず、『無の自覚的限定』が取り組むべき課題として、西田が影響を受けたアウグスティヌスの愛の概念に伴う「隣人愛」の困難と、田邊による西田批判が指摘したような「歴史の非合理性」の説明の不足を挙げる。そして、これらの二つの課題がいずれも「時」と「永遠」の関係に関わることを示し、それに対して西田の「永遠の今の自己限定」および「非連続の連続」

という時間論が応答をなすものであることを論じる。それは、「永遠の今」からの〈時の始まり〉が「自愛的自己」の自己矛盾に絡み合っていることを明らかにする一方で、「汝」への愛を根拠づけることをさらなる課題として残していることを確認する。

この課題を受けて、第4章では、「私と汝」論における〈自覚の始まり〉の構造を、「絶対の他」をキーワードとして明らかにする。「絶対の他」は、「自覚」において「見られた自己」であるとともに、「汝」でもあるという二義性を有する。この「絶対の他」の二義性において、「真の時」を生み出す「自覚」と、「私と汝」の「空間的關係」とが交錯する。それゆえ、時が「永遠の今」から〈始まる〉ということは、私の「自覚」が汝との「応答」から〈始まる〉ということに基礎づけられる。しかし、精神科医・木村敏(1931-2021)による「私と汝」論解釈によれば、統合失調症患者においては「絶対の他」が成立しない。この指摘を受けて、本稿は、自覚が〈始まらない〉と訴える他者に対して、〈自覚の始まり〉を伝えるとはどういうことかという問いへと再定式化し、第2部における探求課題とする。

第5章では、「私と汝」論から「歴史的世界」論としての後期西田哲学への転回を準備する考察として、この時期の西田哲学における「哲学史」の意義を明らかにする。後期西田哲学の「歴史的世界」論は「永遠の今の自己限定」という時間論に基づくものであって、いわゆる「過去」の出来事を時系列に沿って語るものではない。これに対し、本稿は、中期末の西田哲学における「哲学史」の試みを、「歴史的世界」論を準備した事例分析と見立てる。それは、古代ギリシャ哲学のイデア的実在の把握に始まり、中世哲学の人格的実在、近代哲学の経験科学的実在、そして「今日」の歴史の実在へと至り、後期に入る西田哲学へと合流する。この「哲学史」の試みを通して、後期西田哲学は「歴史の実在」をその内側から見るという視点を獲得したことを示す。

続いて、第2部は、第6章から第9章(終章)までの4つの章から構成される。

第6章では、西田の教育学論文における〈教育＝一種の形成作用〉という定式の意義を、それまでの西田哲学における「形成作用」の意味を考察することによって明らかにする。西田の教育学論文は、弟子の木村素衛が哲学・美学か

ら教育学へ転身するにあたって「エール」として送られたと解されることがある。この解釈によれば、西田の〈教育＝一種の形成作用〉という定式は、木村に対して美学と教育学の近さを示すために提示された。しかし、教育学研究において、教育を芸術制作になぞらえる比喻は、人格を物になぞらえる危険を伴うとして批判されてきた。これに対し、本稿は、教育学論文に至るまでの西田哲学における「形成作用」の意味を考察することにより、西田の定式が、教育者が一瞬一瞬に自己の行為の限界に触れるとともに、それを越えて被教育者が自己形成をなす作用を指していることを明らかにする。

第7章では、西田の教育学論文における「自由」の意義を、弟子の木村素衛が西田に対して投げかけた「自由意志」の問題を切り口として考察する。木村教育学研究において、西田から木村への「エール」は一方向的であるとの指摘がなされてきた。これに対し、本稿は、西田が教育学論文を著すに先立って、木村が「自由意志」の根拠づけの問題を西田に投げかけていたことに着目する。それに始まる両者の応答は、一方向的な教授でも、相互に対等な議論でもない。西田はあくまで自らの考えとして木村に応え、木村はこれを受けとめながらも独自の考察を進めていく。この応答の延長上に位置づけるとき、西田の教育学論文は、「社会的・歴史的世界」における自らの行為へと視野を広げることを木村に勧める内容であったことを明らかにする。

第8章では、西田の教育学論文以降の西田と木村の応答を、双方の「歴史的な自然」概念を検討することを通して明らかにする。教育学に転身してからの木村は、さらに西田の「歴史的な自然」概念を取り入れつつ、「表現的生命」の教育哲学を構築する。しかしながら、木村教育学は自然と人間の調和のみを考察し、不調和を見逃していたという批判を受けることがある。これに対し、本稿は、西田の「歴史的な自然」概念を参照することにより、木村が取り入れなかった「死を含む生命」という考え方に注目する。このテーゼを木村の「歴史的な自然」概念に反映することにより、木村の「教育」の規定に自然と人間との不調和を読み込むことができることを示す。

以上の考察を受けて、終章では、〈西田哲学から森教育人間学への応答〉をなす。第一に、「私と汝」論における「自覚の事実」は、「〈自覚の始まり〉の事実」として読み換えることが可能である。「自覚」を所与の時の中で考えるのではな

く、「自覚」と同時に〈時が始まる〉と考えた点で、西田は徹底して動的に〈自覚の始まり〉を見つめたといえる。第二に、他者の〈自覚の始まり〉を他者になり代わって語ることは不可能である。〈自覚の始まり〉を伝えるに当たって、西田は「自覚」を直接に語るのではなく、他者との「応答」を通して、他者の〈自覚の始まり〉を媒介するような「汝」となろうとした。応答の第三は、「自覚」はいったん達することによって確実となるのではなく、すべての瞬間において新たに〈始まる〉事実であるということである。森の教育人間学における生成の事実と同様に、西田哲学の〈自覚の始まり〉の事実もまた、〈始まる〉ことの不確実性に根差している。